

海の魅力、中・高生が発信

全国大会12作品を審査

【函館】北海道大学大学院水産科学研究院はこのほど、同大学大講義室で、「海の宝アカデミックコンテスト2022全国大会」と日本PROJECTの頂上コンテストを開いた。全国の中・高生に海の魅力である「海の宝」を発信し、自ら学ぶ機会をつくり、芸術や研究をしてもらうため、2016年から実施している。今回は3年ぶりに函館で対面（オンライン併用）で開催した。

全国4ブロックの事前表が行われ、最優秀賞審査284作品から選ばれた2部門計12作品の発



左から小高さん、藤原さん、都木院長

都先端科学大学付属中学校の小高恵真さん、藤原さくらさんの「魚膠—古の天然物質」、マリン・サイエンス部門は山脇学園中学校の岡村佳歩さんの「海が宝—生物学的多様性の維持にかかるコストから考える」が選ばれた。

最初に同研究院の都木靖彰院長は「私たちの大学の名称の『水産』は、水が産み出すもの、『海の宝』を研究する。近年は『海の宝』だけでなく、人と水との関わりを調べ、人が海などに影響を及ぼさないような研究もしている。皆さんの作品にもそうした人との視点

が採り入れられ、深く考えられていて非常に感銘を受けた」などあいさつした。

来賓として日本財団海洋事業部海洋環境チーム



岡村さんと都木院長

の溝垣春奈准チームリーダーは、「中・高生の皆さんがさまざまな視点から海に関心をもつのは素晴らしいことで、貴重。誇りをもって多くの人に海の魅力を発信してほしい」と述べた。

「魚膠—古の天然物質」の発表で小高さんと藤原さんは、芸術や美術品などで伝統的に素材として使われているニカワを紹介。魚由来のニカワは純度が高いことなどを説明し、今では化学品に

て代わられるようになっていくが、これからも大切に有効利用していきたい、と報告した。

「海が宝—生物学的多様性の維持にかかるコスト

トから考える」で岡村さんは、小さな水槽で育てているサンゴや熱帯魚などにかかる電気代などの費用を基に、そこから沖縄近海でサンゴを維持するための費用を換算。年間約400兆円になると試算し、自然界が維持しているサンゴ礁の価値を訴えた。

このほかマリン・カルチャー部門は最優秀賞のほか、アニサキスや未利用魚などをテーマにした作品など、マリン・サイエンス部門は、生物多様性保全のコストや、瀬戸内海のマイクロプラスチック汚染対策、アマモの育成などをテーマにした作品が発表された。

海の宝アカデミックコンテスト2022